



写真1 御座田遺跡1区第2トレンチ遠景(北西から)

水田景観の中の畠跡

甲府盆地の西部、富士川の上流河川である釜無川右岸の氾濫原に位置する山梨県韮崎市龍岡町下條南割地内の圃場整備事業に伴い、韮崎市教育委員会と当研究所で発掘調査区を分けて令和3(2021)年10月～令和4(2022)3月かけて行った御座田遺跡の発掘調査で、古代末頃と思われる水田跡と畠跡が検出された。それら耕作遺構は洪水イベント層にバックされた状態で埋没しており、その影響を強く受けながらも遺構の遺存状態は概して良好であった。

その中で道路新設地点1区第2トレンチでは、幅広の畦畔状の高まりを境として水田と畠が共存する状況が確認できた。畠跡は当時の基幹水路であったと思われる旧河道に面して造られており、畠の畝を形成する土壌は、並存する水田の耕作土壌と同質である。律令制下における畠は制度的に水田とは異なり、かつその評価も低かったが、11世紀以後の制度的な差異の消滅および土地利用の進展の結果、この頃には田畠を共に有効利用する集約

的な土地利用形態となっていた状況がうかがえる。

また、当該遺跡範囲内では、現代の表層においても一町(約109m)方格の坪区画を単位とするような、いわゆる「条里型地割」は認められず、これまでの発掘調査状況から当該エリアの現代に広がる水田景観や水路のあり方は、古代末の景観をほぼそのまま継承していると思われる。(平野 修)



写真2 1区第2トレンチ内の畠跡と水田跡(北から)

調 査
レポ-ト

古代末期の炭焼窯

—山梨県韮崎市御座田(みさだ)遺跡の調査事例から—

平 野 修

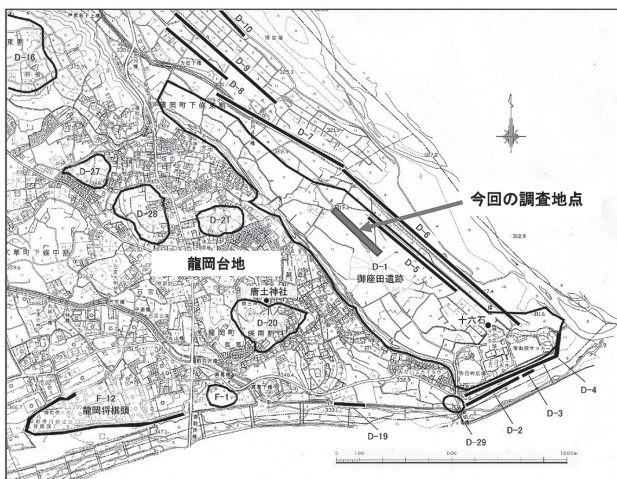
はじめに

山梨県韮崎市龍岡町下條南割地内に所在する御座田遺跡は、甲府盆地の北西部の釜無川と御勅使川の合流地点に程近い、釜無川右岸の氾濫原と、御勅使川の土石堆積物で覆われた小扇状地上に立地する遺跡である。



第1図 御座田遺跡の位置

本遺跡の発掘調査は、圃場整備事業に伴い平成28(2016)年度から発掘調査が行われている。これまでの発掘調査では、中世から近世にわたる村落居住域や墓域、耕作地の一部などが検出され、さらに龍岡台地崖下には6世紀末の古墳時代後期から、8世紀末～9世紀の平安時代初めにかけての須恵器窯が存在することが確認されている(渋谷 2017)。



第2図 今回の調査地点

今回報告する発掘調査地点は釜無川右岸の氾濫原にあたり、韮崎市教育委員会と当研究所で発掘調査区を分けて令和2(2020)年11月～令和3(2021)3月かけて行われたものである。当研究所は圃場整備事業第2工区の全長約270mに及ぶメイン道路となる新設道路地点を担当した。発掘予定地内の一箇所には、現状の水路(堰)が横断していたため、その箇所から南東側を便宜的に1区、北西側を2区として調査を進めた。総調査面積は2,825㎡で、2022(令和4)年3月に報告書を刊行している。調査の結果、畠跡をはじめとする耕作遺構(SN)が5箇所以上、旧流路や人工的な水路もしくは洪水等に伴う溝状遺構(SD)52条、炭焼窯(SY)4基、土坑(SK)82基、ピット(SP)45が検出されている。

今回は、それら検出された遺構群の中で、近年、古代の巨麻郡域を中心に発掘調査事例が増加している炭焼窯を取り上げたい。本遺跡でも炭焼窯については、前回令和元年度で検出された中世村落内でも検出されており、製炭は古代から中世にかけての基幹産業の一つだったと考えられる。

1. 本遺跡の炭焼窯とその用途について

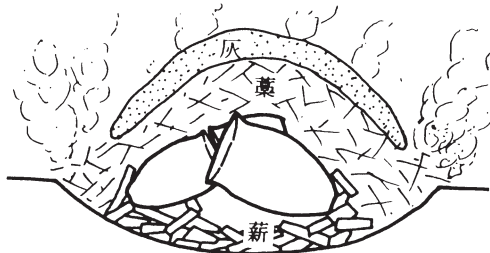
御座田遺跡における今回の新設道路地区の調査では、総延長4.0～7.0mを測り、舟形を呈する土坑状の炭焼窯や、長軸が2.0mを測り、楕円形を呈する土坑状の炭焼窯が計4基検出されている(第4図参照)。

しかし現地調査の段階では、土器の出土は全くなく、炭化材片のみが出土していたため、炭焼窯とはせず、土坑や性格不明遺構として調査を行っており、後に村田文夫氏や木立雅朗氏の論考にふれたことによって、土師器焼成坑にも似た「伏焼法」や「覆い焼」という焼成法を用いた製炭遺構(木立氏は『製炭土坑』と呼ぶ)の存在を確認することができた(村田1991、木立1997)。

特に木立氏は、製炭土坑と土師器焼成坑とは形態的にも似ており、共に炭化材の出土や被熱痕跡がみられることから両者を混同してしまう恐れがあるとされ、穴沢義功氏や望月精司氏、山田真一氏らの研究を参考に以下のように製炭土坑の特徴をまとめている。

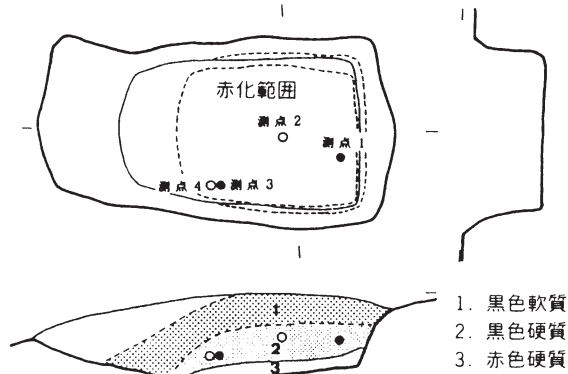
- ①製炭土坑では基本的に床面は赤色焼土化しない。
- ②壁の焼成も土師器焼成坑に比べて弱い傾向が認められる。

B類焼成坑（特にBⅡ類）の焼成復元



久保田氏の「覆い焼」実験（久保田1989）

A類焼成坑（AⅡ類）の焼成実験土坑



北野氏らの「覆い焼」実験による
焼成土坑（久世他1996）

第3図 土師器焼成坑の焼成復元図（望月 1997 文献より一部転載）

- ③製炭土坑では低い温度を保ち燃やし尽くさないため、タールや炭素が土坑に吸着する。
- ④多量の木炭や炭層が確認されるが、これは多量に生産された木炭のうち細かく割れて採集できない碎片、もしくは粉状の炭が利用価値のないものとして放置されることが多い。

以上の内容をまとめると、製炭土坑は、壁や床面は赤色焼土化せず、炭化材の出土が多い、とすることができ、本遺跡で検出された4基の炭焼窯は、以上の条件をすべて満たしていることから、「伏焼法」や「覆い焼」という、土師器焼成坑でも用いられた焼成法によって製炭が行われていた遺構だと認定できよう。

ちなみに令和元年度の道路地区の調査でも道路第6調査区において、多量の炭化材とともに被熱痕跡がみられない10世紀前葉の土師器坯（完形）を伴った長さ3.1 m、幅1.5～1.8 m、隅丸長方形を呈するSK4とした土坑状の炭焼窯が1基検出されている（第4図参照）。当該遺構では土器がわずかながら出土したものの、やはり土坑底面や壁には顕著な被熱痕を認めることはできなかった。

しかしながら本遺跡の炭焼窯は、先述したように炭化材以外の遺物の出土は皆無のため詳細な帰属時期は特定

できていない。そのため出土炭化材の放射性炭素14年代測定と、炭材の樹種同定を行った。

その結果、年代的には2σ暦年代の確率が高い年代を示せば、SY01が1061-1157 cal AD、SY02が1080-1153 cal AD、SY03が1019-1049 cal AD、SY04が1060-1157 cal ADで、平安時代中葉から後葉の暦年代を示している。なお、それら年代測定結果は、御座田遺跡に近在する南アルプス市の野牛島・西ノ久保遺跡や百々遺跡で検出されている同類の炭焼窯に対する年代測定を行っているが、そこでも10～12世紀代とされる年代測定値が示されており、本遺跡と同じ年代傾向を示している。

次に炭化材の樹種については、各遺構とも分析した試料数は1点ずつと少ないが、すべてコナラ属クヌギ節であった。周知のとおりクヌギ（栲）は、硬い木で、現代でもナラ（楡）やカシ（櫟）などと並んで、製炭に用いられる木である。一方、先述の令和元年度調査検出のSK4とした炭焼窯では、出土した炭化材はすべてヒノキで、年代測定での暦年較正年代は600-639 cal ADと、7世紀前葉の推定年代が示されている。そうした結果から、数百年を経た段階では、御座田遺跡周辺の植生が変化していたと推測される。

次に炭材の用途については、御座田遺跡内には先述したように古墳時代後期から平安時代にわたる須恵窯の存在が知られており、土器生産に用いられたとも考えられるが、6世紀から9世紀という須恵器窯操業時期とは齟齬がみられる。御座田遺跡内では中世の集落からフィゴの羽口片や鉄滓が出土していることから、今回検出された炭焼窯は、鍛冶や生活燃料などに用いられていたと考えておきたい。

2. 御座田遺跡周辺の炭焼窯について

先述のように、山梨県内でも近年の発掘調査で炭焼窯の調査例は増加しており、現在までのところ甲府盆地西部地域における古代旧巨麻郡内に集中している（野代1994、櫛原2021）。御座田遺跡に近接する遺跡では、南アルプス市の野牛島・西ノ久保遺跡や、立石下遺跡、百々遺跡などがあるが、9～12世紀代のもものが中心となっている。御座田遺跡から百々遺跡が所在する南アルプス市一帯は、中世牧である「八田牧」が置かれたとされる地域であり、12世紀段階の屋敷地の一部が確認されていることから、牧が製炭など多くの基幹産業を要していたことがうかがわれる。貴重な燃料材である炭が御座田遺跡内だけの消費ではなく、周辺エリアに供給していたとも考えられる。御座田遺跡は古代の土器生産から中世では



写真1 SY01 完掘状況全景 (南から)



写真2 SY01 炭化材出土状況 (南から)

製炭の場の一つとして変化していったとも考えられる。

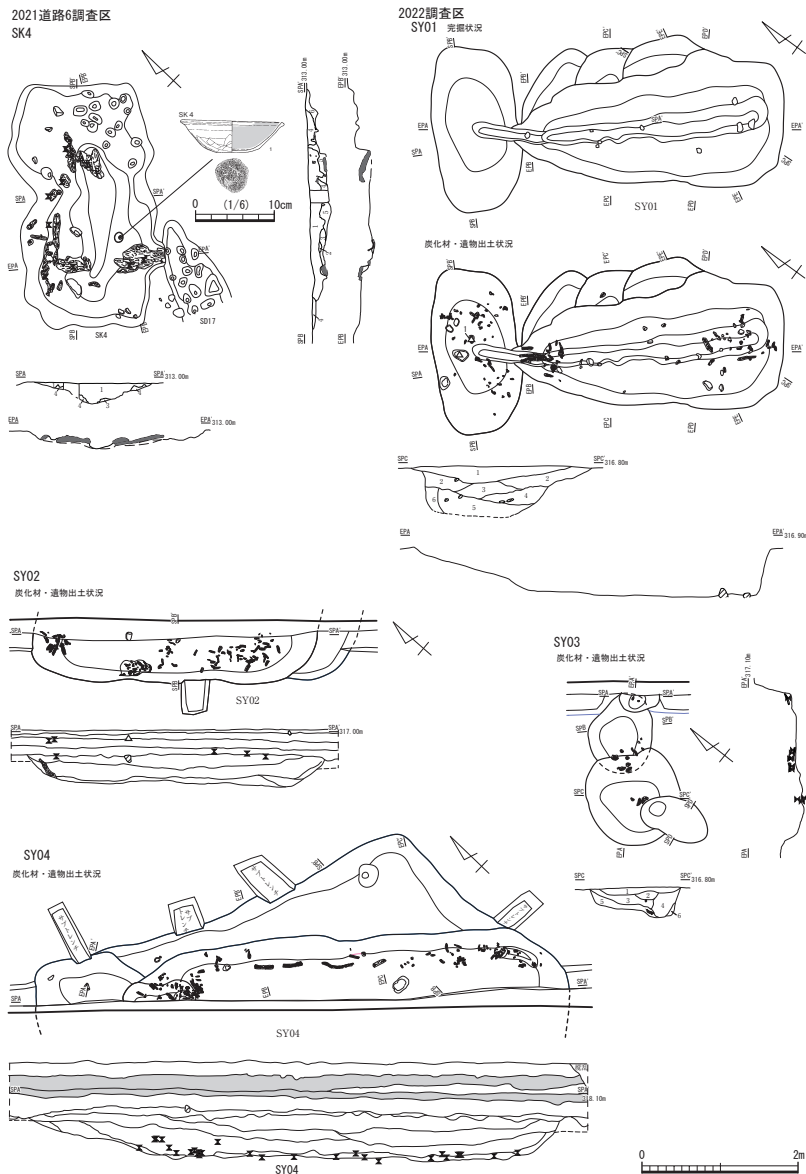
今後の課題

遺跡不毛の地とされてきた釜無川右岸の氾濫原で、今回の調査でも古代末期の畠遺構や炭焼窯などの生産遺構

が検出することができた。本遺跡で土器生産とともに行われてきた製炭が、土器生産の崩壊後に牧の発展とともに製炭も活発化したのか、今後の課題でもある。

【謝辞】

本拙稿の第4図の作成に際しては岩崎満佐子氏のお手を煩わせた。ここに記して感謝申し上げる次第である。



第4図 御座田遺跡検出古代の炭焼窯 (縮尺任意、韮崎市教委他2021・2022報告書より作成)

【参考文献】

本立雅朗 1997「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』19-25頁 窯跡研究会
 榑原功一 2021「御座田窯跡群と巨麻郡の開発—須恵器、炭窯、製塩土器—」『山梨県考古学協会誌』第27号 17-32頁 山梨県考古学協会
 渋谷賢太郎 2017「御座田遺跡(韮崎市)」『山梨考古』第146号 4-5頁 山梨県考古学協会
 渋谷賢太郎 2021「韮崎市 御座田遺跡」『山梨考古』第161号 8-9頁 山梨県考古学協会
 韮崎市教育委員会他 2021『御座田遺跡—県営経営体育成基盤整備事業 龍岡地区圃場整備(第1工区圃場・道路新設地点)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
 韮崎市教育委員会他 2022『御座田遺跡—県営経営体育成基盤整備事業 龍岡地区圃場整備(第2工区道路新設地点)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』南アルプス市教育委員会他 2009『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第20集
 村田文夫 1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55 22-74頁 物質文化研究会
 望月精司 1997「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』26-41頁 窯跡研究会
 山梨県教育委員会他 2001『立石下遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第189集
 山梨県教育委員会他 2004『百々遺跡3・5』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第213集

研 究
ノ ー ト

蛍光 X 線スペクトルを用いた黒曜石産地分析の試み

三 浦 麻 衣 子

はじめに

先史時代に利器として広く利用された黒曜石は産地によって化学組成が異なるという特徴を持つ。この特徴を利用して、原産地黒曜石と遺跡出土黒曜石石器の化学組成を比較することで、遺跡出土黒曜石石器の産地を推定し、黒曜石をめぐる人々の移動や流通ネットワークを検討する研究が進められている。

黒曜石の化学組成の測定は蛍光 X 線分析法、中性子放射化分析法、EPMA 法などで行われているが、非破壊かつ短時間で分析できることから、蛍光 X 線分析法が主要な分析法として定着している。

近年は黒曜石が産出する原産地遺跡の詳細な研究が進み、産地の状況と遺跡出土黒曜石石器の産地推定結果を比較することで、より詳細な黒曜石の流通状況を把握できるようになってきた。一方で、蛍光 X 線分析は簡便に分析ができるものの、中性子放射化分析などの分析法と比較すると精度が低く、精度の高い分析法では判別が可能であった産地が判別できないという課題もある。

現在、蛍光 X 線分析で得られたデータの解析は研究者により手法が異なるものの、産地分析に有効と考えられる特定の元素の X 線強度や半定量値が利用されている。本報告ではこれまでの研究では利用されていなかった蛍光 X 線スペクトルをデータ解析の対象として利用し、黒曜石の新たな産地分析法を検討するものである。蛍光 X 線スペクトルを利用することで産地分析に有効と考えられる元素を選択することなく、今まで見逃されてきた可能性のあるスペクトルの挙動を解析に取り込むことで、より詳細な産地分析を実現したいと考えている。

1. 蛍光 X 線分析の方法

エネルギー分散型可搬型蛍光 X 線分析装置 (Innov-X Systems DELTA PREMIUM DP-4000) を使用し、非破壊で行った。分析モードは 2 Beam Mining Plus を使用し、タンタル (Ta) 管球の電圧を自動で 40kV と 10kV に切り替えて測定することにより塩素 (Cl)、硫黄 (S) などの軽元素の分析も可能である。測定時間は 90秒間とし、X 線の照射範囲は直径約 10mm の円である。

分析対象試料は関東周辺の黒曜石原産地試料とした。分析試料の産地は次の通りである。栃木県：高原山、東京都：神津島 (沢尻湾・長浜・名組湾・小浜・前浜)、

神奈川県：畑宿・芦の湯、静岡県：柏峙・上多賀、長野県：和田峙 (東餅屋東・小深沢・和田峙西)・男女倉 (高松沢・牧ヶ沢・ブドウ沢右岸・土屋沢)・下諏訪 (星ヶ塔・星ヶ台)・長門 (星糞峙・鷹山川)、新潟県：板山。

2. 蛍光 X 線スペクトルの解析方法

解析は統計分析ソフト R を利用して、多変量解析の主成分分析で行った。また、蛍光 X 線スペクトルのデータは規格化し利用した。

黒曜石に対して蛍光 X 線分析を行うと、図 1 のような蛍光 X 線スペクトルが得られる。図 1 から蛍光 X 線エネルギー 10keV を境としてバックグラウンドに差が見られることから、10keV までと 10keV 以降でピークが確認できる 13~16.2KeV までの 2 つに分けて解析した。10keV までは主成分元素、13~16.2keV は微量成分元素の蛍光 X 線スペクトルに該当する。

3. 考察

分析対象とした原産地黒曜石間で分散が大きい蛍光 X 線スペクトルのピーク的位置を確認したところ、主成分元素は Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄) であり、微量成分元素では Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム) であることが確認できた。特に主成分元素では K、Fe、Ca が、微量成分元素では Rb、Sr、Zr が原産地間の分散が大きくなる元素であるとわかった。つまり蛍光 X 線スペクトルを見る限り、これらの元素が分析対象とした原産地黒曜石の判別に有効な元素であるということを示唆している。

図 2、3 は主成分分析結果の散布図である、図 2 は

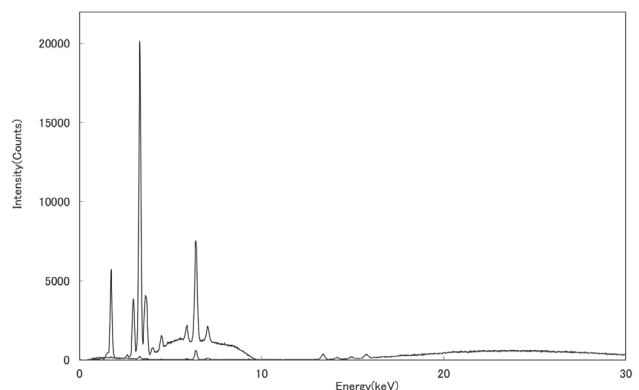


図 1. 黒曜石の蛍光 X 線スペクトル

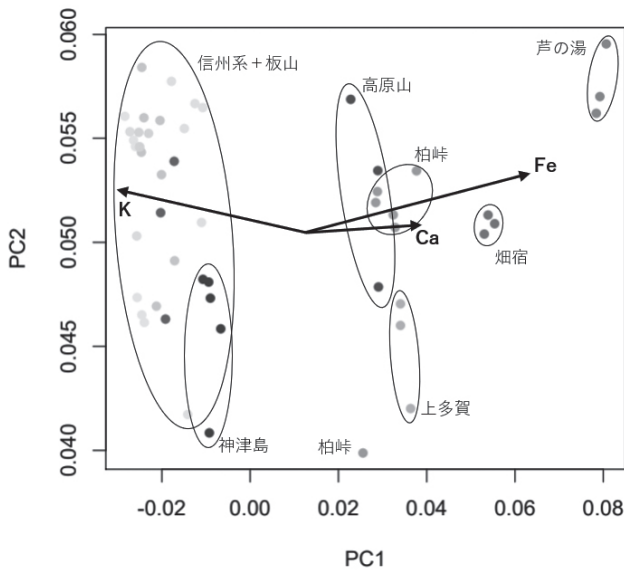


図2. 主要元素の主成分分析の結果
(蛍光X線エネルギー10keVまで)

10keV までの主成分元素を、図3は13~16.2keVの微量元素成分元素を対象としたスペクトルから得られた結果である。図内の矢印は主成分負荷量を表す。矢印には元素記号を付与しているが、例えば図3においてRbの蛍光X線スペクトルのピークが高いほど図中の右端に寄ってプロットされるということを示している。

図2の主成分元素のスペクトルを利用した散布図では産地ごとにおおよそプロットがまとまっているが、プロットの広がり大きい傾向が認められる。また、信州系(分析対象試料となった原産地試料のうち、長野県内が産出地の試料の総称とする)と板山については判別ができていない。信州系+板山と神津島、高原山と柏峠の産地ごとを括った囲みも一部重なっている。

図3の微量元素成分元素の散布図でも主成分元素と同様に産地ごとにプロットがまとまった。そして、そのまともは主成分元素よりも明確に産地間の差を示している。図2では判別ができなかった信州系と板山も微量元素成分元素の蛍光X線スペクトルを利用した解析では判別が可能という結果が確認できる。信州系は、下諏訪地域の星ヶ塔と星ヶ台はプロットが密に集中している。和田峠・長門の各産地もプロットがよくまとまっていることがわかる。一方で男女倉の各産地はプロットが広がる傾向にあることがわかった。高原山と柏峠は、主成分元素では判別が困難であるが、微量元素成分元素では明確に判別が可能である。

おわりに

本報告では蛍光X線スペクトルを利用した黒曜石の産地分析を試みた。その結果、大まかな地域単位の産地分

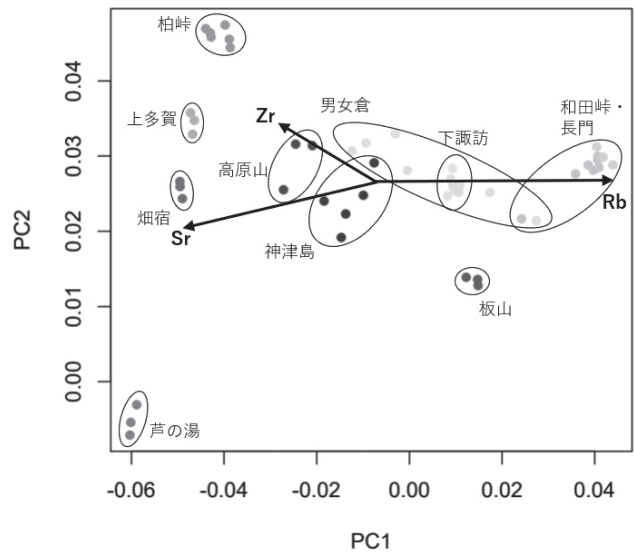


図3. 微量元素の主成分分析の結果
(蛍光X線エネルギー13~16.2keVまで)

類は可能ということを示すことができたが、近距離に位置する産地間の分類は現状では難しいことがわかった。

今後、より詳細な産地分類を行うためには、大まかに産地分類を行った後に、分類されたグループごとに再度解析を行う等の工夫をしていく必要がある。また本報告は可搬型蛍光X線分析装置を用いて、大気環境下で試料を分析している。分析時に平滑な面を選択して測定してはいるが、試料の形状により、蛍光X線の検出強度に差が出てしまう。この試料形状による誤差をどのように考慮して解析を進めていくかも課題である。さらに、黒曜石の産地分類に有効な元素がいくつか確認されたが、原産地黒曜石の定量値でも確認を行い、本解析法が妥当であるが検討する必要もある。これから、正確な黒曜石産地分析につながる手法となるよう改善を加えていきたい。

【主要参考文献】

金井拓人、池谷信之、保坂康夫 2018「化学組成データの対数比解析を利用した黒曜石の原産地推定」『文化財科学』第78号
 大工原豊、長田友也、建石徹編集 2020『縄文石器提要』ニューサイエンス社
 三浦麻衣子、建石徹、二宮修治 2020「最近の黒曜石産地分析の動向」『文化財科学』第80号

謝辞

本報告にあたり東京学芸大学名誉教授・二宮修治先生、東京学芸大学講師・新免歳靖先生、帝京大学文化財研究所助教・金井拓人先生にご協力を頂きました。また、本研究はJSPS科研費JP19K13417の助成を受けたものです。

追悼文 萩原三雄所長を悼んで

河 西 学

萩原三雄所長が、2022年2月19日にご逝去された。ここでは、故人をしのび、当研究所に関連したことを重点的に故人の足跡を振り返ることにする。

萩原さんは、1947年8月25日に甲府市で生まれる。甲府一高では卓球部で活躍されたと聞く。早稲田大学法学部に進学され、サークル活動として古美術研究会に属し、京都などで合宿しての仏像、建築などの調査や、関東地方での発掘調査に参加したと伺っている。70年安保闘争での交通の混乱時に駅のホームでの押し屋のアルバイトをしていた功績で表彰されたと語っておられた。大学卒業後、甲府市役所に奉職され、議会事務局などの仕事に携わる一方、考古学・歴史学の研究活動に熱心に取り組まれ、山梨郷土研究会、甲斐丘陵考古学研究会、山梨県考古学協会、日本考古学協会などの活動で二足のわらじを履いて活躍される。末木健氏と共著で『山梨の考古学』を1983年に刊行された。

時はバブル景気の頃、山梨県などからの設置要請を受けた帝京大学グループ内で山梨に文化財研究所の設立機運が盛り上がり、帝京大学の沖永莊一総長を理事長とする財団法人山梨文化財研究所が1986年6月13日に設立される。谷口一夫初代所長から要請されて、萩原さんは甲府市役所を退職し、研究部長として1986年8月1日に入所された。研究所は、全国レベルの学際的研究施設を目指して活動したことから、設立の経緯を踏まえ大学とのつながりを明示するために研究活動における施設名称を法人名とは別に帝京大学山梨文化財研究所として使用した。

萩原さんのそれまでの研究は、武田の城、丸馬出の研究、平安集落論など多岐にわたっていたが、城の研究など中世の研究を重視して、萩原さんが中心となって武田氏研究会を1887年に立ち上げる。また、それまで山梨県立図書館にあった山梨郷土研究会の事務局を研究所内に受け入れたほか、山梨考古学協会、甲斐丘陵考古学研究会などの事務局機能も研究所内に置き、考古学や歴史学研究の拠点化を図った。さらに『山梨文化財研究所報』を1987年刊行し、国立歴史民俗博物館研究報告などを参考にして、『帝京大学文化財研究所研究報告』を1989年に創刊した。

ふるさと創生事業の一環として湯之奥金山遺跡の学際的総合研究を行う湯之奥遺跡学術調査会が下部町で発足

し、萩原さんは中心メンバーとして湯之奥遺跡学術調査会の事務局を当研究所に受け入れ、各分野の新進の研究者らに声をかけ、多くの大学の学生なども参加する大組織を作りあげた。夏休み期間に湯之奥金山の中の中山金山を中心に、テントを張って泊まり込みの発掘調査を1989～1991年の3年間にわたって実施し、多くの成果を『湯之奥金山遺跡の研究』として刊行した。この研究を通して萩原さんは、多様な形態の多数の石臼に接し、金属精錬技術などに関する鉱山史に大変興味をもたれ、これがその後のライフワークのきっかけとなった。なお萩原さんは、この研究を進めるにあたり、直前に今村啓爾先生ら東京大学が中心になって調査された黒川金山の研究を大いに意識していたと思われる。

1990年に山梨県史編さん事業が開始され、萩原さんは委員を務め、中世分野での責任者としても活躍され、石井進東大名誉教授、網野善彦先生など中世史研究の重鎮らとの協同研究の中から新たなシンポジウム「考古学と中世史研究—中世考古学及び隣接諸学から—」（1990～1995年）を企画された。続いて研究所独自の研究集会「遺跡・遺物から何を読みとるか」を開始した。この研究集会は、考古学における様々な視点から新しい研究アプローチを見いだそうとするもので、1997～2000年に開催され、その内容を『研究集会報告1～4』として刊行して配布した。その後は「考古学と中世史シンポジウム」として2003年の第1回から2015年第13回まで継続し全国の中世の学際的研究を牽引する場を提供した。幾多のシンポジウム開催によって、全国の研究者と昼間は発表会場で議論し、夜は懇親会・二次会等の会場で深夜まで議論するというスタイルが確立され、分野や年齢などに関係なく多様な議論、コミュニケーションが図られ、若手の研究者が育っていった。

1991年からは中国科学技術大学と帝京大学との学術交流協定に基づいた交流が行われ、萩原さんは2回訪中し、安徽省、河南省、景德鎮窯などを視察された。

萩原さんは、行政では議会事務局の仕事を経験され、市議会議員の方々との親交があり、いくつもの学会、印刷出版業界、マスコミ関係にも人脈があり、それらの大きなネットワークを存分に活用されていたように思う。

県史編さん事業で得られた知見を広く県民の文化の発信拠点としての県立博物館建設に向けての機運が醸成さ

れる中、1994年山梨県幸住県計画の中に県立博物館の整備が位置づけられると、萩原さんは関係委員会の中心的な役割を果たし、県立博物館の設立準備、基本構想作成、展示基本設計などに関わり、2005年開館まで尽力された。

同じ石和の敷地内にある山梨伝統産業会館の館長に萩原さんは、1999年に就任する。この施設は、帝京大学と山梨県、当時の通産省が出資して設立した財団法人山梨伝統産業振興会が運営する博物館施設で、伝統工芸の保護育成、展示を行ない、ミュージアムショップや体験実習室などを併設し、大学生の博物館実習も受け入れていた。2003～2009年にかけては夏休み中8月最後の日曜日に「伝産祭り」と称した大イベントを企画し、県内からの大勢の来客があり盛況であった。

帝京大学文学部史学科に大学院を新設しようとする動きの中で当時の学科長の南啓治先生などとの協議があり、認可に向けて大学の体制を整備拡充する必要性があったため、2011年から財団法人職員が非常勤講師として帝京大学八王子キャンパスの史学科授業を担当することになり、翌2012年には帝京大学文学研究科日本史・文化財学専攻の大学院が新設された。同時に帝京大学文化財研究所が、グローバルな活動をする学際的な研究所として2012年に大学附属研究所として新たに設立されて、萩原さんは初代所長として就任され、公益法人改革によって公益財団法人に移行した山梨文化財研究所の所長も兼務することとなった。これを機に萩原さんの本務は、財団法人から帝京大学に移った。

一方、財団法人山梨伝統産業振興会は、公益法人改革の際に公益法人化を選択せず、財産を帝京大学に寄附することで大学附属施設になることを大学との交渉の中で2013年に選択し、帝京大学やまなし伝統工芸館が新たに誕生したが、そこには萩原館長の判断があり、以降も館長を続けられた。

帝京大学文化財研究所については、グローバルな学際研究を展開することおよび大学院の充実を視野に、新たな分野における実績と才能あふれる人材を積極的に毎年のように採用していった。山内和也教授（現所長）はシルクロードの研究を継続し、毎年発掘調査団を組織してアク・ベシム遺跡の調査を実施し、国内ばかりでなく世界的にも高く評価される実績を上げてきている。またジョージア、イラン、アフガニスタン、シリアなどの文化財関係の研究者との交流、研修などを通じて広く活動が知られるようになっていく。萩原さんは所長としてこれらの事業を強力に推進してきた。

公益財団の運営については、職員の高齢化や独立採算

性の維持の不安定さを萩原さんはいつも心配されていて、2020年には財団所有の土地建物を帝京大学へ売却し、得られた資金を効率的に運用することで法人の財務状況の改善を図っていただいた。2021年10月以降体調不良の中でも法人運営に関しては、厳しくも温かく叱咤激励していただいた。

萩原さんは、高い志をもち、組織の発展を願って、多くの人に会って話し、実現するための環境作りを熱心に行い、多くのことを具現化されてきた。残された私たちは萩原さんの遺志を受け継いでいきたいと思う。

萩原所長、どうぞ安らかにやすみください。



写真1 学術交流で来日した中国科学技術大学関係者が帝京大学沖永莊一総長・理事長を表敬訪問した際の写真（1993年1月26日）（当時の萩原部長は右から二人目）



写真2 石見銀山視察時の写真（1995年11月27日）（萩原さんは前列左端）

編集後記

本研究所を先頭に立って牽引してこられた萩原三雄所長がご逝去されましたので、追悼文を掲載いたしました。ご冥福をお祈りいたします。（MK）